河合榮治郎における教養と理想主義

清滝仁志

はじめに
一　河合の教養主義の性格
二　大学教育と教養
三　河合の大学論
四　教養の実践
おわりに

はじめに

河合榮治郎（明治二十四年-昭和十九年、一八九一年-一九四四年）は、東京帝国大学経済学部の教授であり、戦前日本の軍国主義を批判した戦闘的な自由主義者として一般に知られる。政治思想史研究の対象としてみると、彼は、近代日本の政治思想家としてはユニークな存在である。それは、第一に、イギリス理想主義の研究をつうじて、彼

は、自己の思想の体系性を強く意識し、着々とそれを構築していったことである。しかも、山下重一が「河合榮治郎ほど、自己を語ることの多かった思想家は稀れであろう」と評したように、[1]自伝的な文章を数多く書き、自己の思想形成、その構成を詳細に発表した思想家は、他に見られない。[2]

第二に、河合は、教育者として、自己の思想を教育によって広めることに積極的に努め、さらに啓蒙的著作を編集することによって、思想的影響と言えるものを後の思想形成期の世代に与えた。この啓蒙活動は、河合の思想体系に沿って、同時代の多くの第一線の著作家を巻き込んで展開したものであり、昭和における教養主義ブームに貢献した。

河合の思想は、例を見ないほどの体系的内容として、同時代的意義を評価することはできるが、結局、彼の理想主義思想体系は未完のままに終わった。さらに、河合が体系構築に依拠したイギリス理想主義研究も、行安茂が指摘するように、現代の研究水準から言ってテキストの読解方法や同時代の思想的文脈の解明が不十分などの問題があった。[3]

本稿において焦点を当てたのは、第二の点である。河合の思想的影響は、彼の政治思想そのものにあるというよりも、そこから派生した教養主義が中心であった。河合は、直接には、大学教育をつうじて、彼の理念に共感した弟子を学界、官界、経済界に送り出した。[4]彼らの有志は、戦後、社会思想研究会を設立し、河合の諸著作、日記、研究録等を所収した全集を編集した。さらに、河合が編集した「学生叢書」[5]は、多くの青年に教育者としての河合の存在を意識させた。彼の影響力が最高潮に達したのは、その死後、歴史上の人物となった戦後であった。軍国主義と敢然と闘った自由主義思想家として評価される中で、「学生叢書」が復刊され、新制高校・大学の学生に河合ブー

ムとも言える状況が起こった。[6] イギリス理想主義研究者としての河合と教養論とのつながりについては、「人格の完成」というキイ・ワードで通常説明される。しかし、「人格の完成」が、マニュアル的で啓蒙的性格をもつ「学生叢書」とどのようにつながるのか、が不明確であった。

本稿では、河合が昭和初期に展開した大学改革論に着目し、彼が自己の思想体系を具体的に展開する対象として、教育改革を選び、教養論はその延長にあったことを明らかにする。従来、河合の教養主義は、青年を対象に人格の重要性を訴えた啓蒙的性格に注目されることが多かったのに対し、本稿では高等教育改革のための実践活動の一形態として理解している。

一　河合の教養主義の性格

河合榮治郎における教養論は、『三太郎の日記』の阿部次郎に代表される大正の教養主義を引き継ぐものであり、それに河合の社会改革への実践的関心が加わったものと考えられる。彼の教養主義は、大正における教養主義にとって代わったマルクス主義が高等教育機関において排除された後に、支持を集めた。[7] 竹内洋は、大正の「人格的教養主義」に対して、河合の教養主義を社会に開かれた「社会（科学的）教養主義」と呼んでいる。[8]

本稿で河合の教養論を考えるにあたって、確認しなければならないことがある。それは、河合が国家主義の抑圧と闘ったことを高く評価するあまり、そのことを基点にその思想を論じてしまう問題である。確かに戦闘的自由主義者と呼ばれるにふさわしい言論活動を河合は展開したが、政治権力にいかに抵抗したかを思想家の判断基準に単純化してしまうと、彼の問題意識が見えなくなってしまう危険がある。

こうした解釈の典型として、武田清子による教養主義解釈がある。武田は、ケーベルや夏目漱石に影響を受けた阿部次郎や和辻哲郎、白樺派作家などにみられる知的・文化的教養主義と、新渡戸稲造や内村鑑三に起源を持つキリスト教的教養主義を区別し、前者の個人的教養に対し、後者の社会的教養を対峙させる中で、河合の教養主義を後者に分類した。[9] 武田の思想史分析は、個々の思想家の反体制的剛毅性を強調し、プロテスタンティズムを近代的自由と平等の源泉とした理念史のカタログに思想家を分類することに主眼を置いていると見られなくはない。河合の具体的な文献を検討するならば、河合をこのプロテスタントのカタログに入れる根拠は乏しい。[10]

河合と宗教との関係について、伊原吉之助は「断片でなく全体を通読すれば、河合榮治郎が全くといっていいほど宗教に無縁な人間であったことが直ちに明らかになる」と断定し、「ヘブライイズムとは無縁な、純粋にヘレニズムに属する思想家」と説明している。[11] 木村健康は、河合にとって神とは「道徳的努力の理想そのもの」とし、「人間を道徳的努力に激励し鞭うつもの」であり、「救済の神ではなかった」という。[12] そもそも、大正教養主義と対比するものとして、無教会派系統の人々を教養主義に位置づける武田の解釈枠組そのものに問題があるといえる。[13]

二　大学教育と教養

研究者としての河合は、三十歳代後半に絶頂を迎えたとされる。代表的研究の『トーマス・ヒル・グルーンの思想体系』は昭和三年（一九二七年）に刊行された。木村健康は、河合が勉強したのは四十歳（昭和六年）までで、それ以降、大学では諸事に忙殺されたと回想する。[14] 河合は、研究の完成期に教育を通じ、自己の理想主義体系の実現をはかっていた。彼の理想主義は、実践的で生活に即した性格をもち、河合は、それを社会思想の根拠とする以上

に、日常生活の指導原理として重視していた。[15]

河合が大学教育について積極的に議論を展開した時期は、昭和四年（一九二九年）から、休職に追い込まれた昭和一四年（一九三九年）までの約十年である。この時期は論文執筆だけでなく、全国の高等学校を中心に精力的に講演旅行に出かけていた。途中、昭和七、八年の二度目のヨーロッパ留学を挟んでいる。

前期は、マルクス主義者が勢力をもっていた時期であった。昭和四年、河合は森戸辰男と大学問題について論争し、昭和六年、文部省の学生思想問題調査委員を引き受けるなどマルクス主義と対決していた。また同時に、河合を庇護する小野塚総長、矢作学部長の下で本格的に学部行政において活躍し始めていた時期である。当時の著作として、森戸との議論をまとめた昭和四年の「大学の運命と使命」（『帝国大学新聞』掲載）や昭和五年「研究所の設立」（『帝国大学新聞』掲載）「大学の自由とは何か」（『中央公論』掲載）、昭和六年「就職難と大学教育」、「大学教育の再吟味」（『帝国大学新聞』掲載）、これら論文をまとめた『大学生活の反省』、昭和七年に学生思想問題調査委員として蠟山政道とまとめた『学生思想問題』がある。

後期は、マルクス主義が衰退する一方で、滝川事件（昭和八年）、美濃部事件（昭和十年）など、大学を取り巻く環境が悪化し、河合への右翼の圧力が増すとともに、河合が評議員（昭和八年）、経済学部長（昭和十年）、大学制度審査会委員（昭和一二年）に就任し、大学行政における責任が増した時期でもあった。昭和八年の「国家・大学・大学令」（『経済往来』掲載）、昭和九年の「大学改造論」（『経済往来』掲載）、「教育制度改革案」（『帝国大学新聞』掲載）、昭和十年「教学刷新と学制改革」、「高等学校論」（『帝国大学新聞』掲載）、諸評論をまとめた『第一学生生活』など、国家主義の高揚に直面しながら、具体的制度改革を提言した内容が特徴的である。

河合の大学論は、その取り巻く状況が一変しても、その主張の基本的内容は一貫していた。彼はいずれの時期においても、すぐに実施可能な現実的改革論とは言いがたい、自己の理想主義体系にもとづいた理想的な大学論を展開していた。それは、説得力ある内容だが、実務的な指針というよりも、ジョン・ミルやヘンリー・ニューマンという思想家が繰り広げた知の理想的機関としての大学論に近いものであった。[16] 河合の大学論があまり注目されなかったのは、この現実との距離があったからではないか。[17]

河合の教養主義を代表する『第一学生生活』は、昭和十年（一九三四年）に刊行され、「学生叢書」の出版は翌年から開始された。この時期は、河合が経済学部長として学部内改革や論文寄稿、講演会活動で多忙を極め、教育者としての絶頂期であった。河合の教養的著作は、彼が次々に展開した教育改革論の一環として扱われるべきである。

河合の教養論は、単に個人の精神的修養にとどまらず、竹内洋によれば、「必読文献や文章の書き方、いろいろな学校の学生がどのような本を読んでいるかなどの実態調査の情報」もあり、「教養主義のマニュアル本」という性格をもっていた。[18]「学生叢書」は、具体的な高等教育の場を意識した著作であった。それは、アレクシス・トクヴィルがいう「習俗」[19]に影響をもたらした、わかりやすく言えば、高等教育を受ける者のライフスタイルや行動様式に影響をもたらす内容であった。統治エリート層が小規模であった当時、この場の占める社会的位置は高かった。河合の教養主義は、戦前において、高等教育の「習俗」を支配する影響をもっていた。さらに、マニュアル的性格をもつ河合の教養論は、筒井清忠の指摘するように「旧制高校生程度の学力があれば誰もが同じ手順を踏むことによってこの道に進めるようなルートを作り上げたし、またこのルートを歩んでいないものは低く扱われるようなムードを作り上げた」[20]ことで、高等教育の周辺部分をも取り込んでいった。

河合の教養論の影響は、彼の理想主義体系への共感以上に、教養主義をつうじた「習俗」の共通体験がもたらしたものが大きい。河合の教養主義は、エリートの社会改革の意識をくすぐるものがあり、とくに戦後の政治・経済のエリートの行動原理に影響を及ぼした。

伊原は、河合の教養主義を「人格（真善美の調和体）を最高価値」とするもので「自己を鍛えて人格に近づくことを各人の崇高な義務とする」ものとし、この「人格の成長」のためには手段・条件の整備が必要で、だから人格主義者は社会改革に努力せねばならぬとする」と説明する。[21] 河合の教養論は、個人の内面的な自己修養だけをめざすのではなく、人格の完成を社会的なものとしてとらえ、各人の社会的任務の中での価値実現を求めていた。個人が孤立している限り、自己完成は困難であり、他の者と手を携えて活動することによって、人格を完成に導くことができる。河合の読者にとって、他者との共同の場とは高等教育機関であった。

さらに伊原によれば、河合の人格主義は、「とにかく何かたまらなく実行したいこと、言いたいことがあるけれども、それをただ自分だけのものに留めておかないで、他の人びとをもできるだけ多く納得させながら展開してゆこうというところがある」という。[22] 河合は、そういった社会改革の念を理想主義という思想を提起することで、青年の利他的心情を、説得的な普遍的理念に置き換えた。河合は、学生生活をつうじて人格が成長した知識階級による社会的活動に期待をかけたのであった。[23]

三　河合の大学論

河合の演習生であった塩尻公明は、二回目のヨーロッパ留学から帰朝した後の河合の活動として、「学徒・思想家

としての面をいっそう深化し体系化する努力」とともに「一個の思想家であるところの教師として、みずからの理想主義的思想を学生生活の諸問題に適用して、学生界を指導し強化しようとする努力」があったと指摘する。[24] 前述のとおり、河合には、留学前から後者への志向はあった。ただこの時期はマルクス主義者との論争に費やされ、教養主義的主張が目立ってきたのは留学後であった。彼が「学生界」の指導で当初より関心をもっていたのは、大学改革であった。

河合は、大学改革に関する議論の前提として、高等教育をとりまく変化を観察していた。昭和初期は、現代と比較にならないが、大学が大衆化しはじめた時期であった。当時、帝国大学の高い社会的位置づけとは対照的に、卒業者を受け入れる社会的需要とのギャップが生じ、学生の職業選択は容易でなかった。高等教育を受けることが自明の社会的特権であった時期を過ぎ、教育の内容、意義が問いかけられる段階であった。農商務省の実務経験もあって河合は、そのような同時代的状況をいちはやく理解し、文明国共通の社会構造の問題として考えていた。[25]

河合によれば、大学を取り巻く状況は、「大学外に有為の学者の輩出して来た」ことや「学問的著述が多量にかつ廉価に出版されて来たこと」で「大学以外の学的水準が著しく向上した」ことで変化した。ただでさえ、大学卒業生は供給過剰であるのに対し、学問の普及で「大学卒業生と同等の実力あるもの」が社会に産出され、多数の競争者に直面していた。[26]

こうした状況に大学が対応してこなかったことを河合は長らく憂慮していた。[27] 彼は根本的問題として、大学が研究機関であるか、教育機関であるのか曖昧であるということを諸論文で指摘していた。たとえば、「学生叢書」の『学生と学園』での「教師と学生」では次のように論ずる。

「従来日本の学園に於いて研究と教育とが異なる性質ものたることが認識されないで、漫然として二者を混同していたこと、而も教師を任命する場合に、教育者としての資格よりも、研究者としての資格に重きを置いたことが、日本の教育を遺憾ならしめた最大の原因であると思う。[28]」

河合は、日本の大学において「教育者という資格は考えられず、研究者としてのみ考えられ、大学が今現に研究所そのものになっている」一方で、「研究所としては何等研究所らしい発達をなしていない」、「大学でもなく研究所でもない中途半端な文化機関」だと批判した[29]。

河合は「大学が教育の場所だということに、今よりも多くの自覚をなすべきだと思う」というように、大学の使命の中心を教育であると考えた[30]。しかし、河合は大学における現在の教育をあまり評価していない。大学では、「教育指導原理の欠如」、「学生の把握すべき指導原理を研究する制度」が欠如していると断言した[31]。その教育内容は、何の脈絡も連関ももたず、細分化し、孤立した特殊的智識を得るだけのもので、大学は「社会の要望に副うべく能力を欠如している」という。河合は「多数を一堂に集めて知識の切売をするに止まるならば、大学における教育は書籍を繙いて収得されるもの以外何物も残されていない」とし、「大学の学科の配合」が「組織的、計画的でないから、かなりの無駄と消費がある」と言い、「大学は大学ならずして為しえざる何らの教育を企ててはいない」し、大学で教えられるものは「半分の時間と精力とを以て収得しうるかも知れない」と酷評した[32]。

そのような貧弱な内容の教育しか受けない大学生を官界、実業界が評価する点として、河合は「偶然から本質を識別しうる洞察、事態の動向を看破しうる見識、信頼して事を託しうる道徳的人格」を挙げる。彼によれば、これ

は大学や学生が意識したものでなく、「断片的に分散的に成長されたもの」に過ぎない。

河合は、現在の大学教育が職業教育を想定しておこなわれているが、それが貫徹しておらず、中途半端となっていると考えた。そこでは科学のみが学問であるという実証主義が支配しているが、職業教育としては不十分である。彼は、大学の教育において「経験科学の技術者を養成する従来の伝統」を見直すべきだとした。「職業に就くことを生存の第一目的とする人生観を、教育の出立点とする」ことを「大学の教育を害する」とまで言っていた。[33]

そこで河合は、現在の「断片的」「分散的」な人格教育を、総合的なものに転換させることを期待した。その総合にあたって、彼自身の理想主義にもとづいた知の体系に沿った教育を提案した。

河合は、大学の教育を、特定の専門学科教育と学生の人格を陶冶するという教育に二分した。最も具体的に、後の時期に書かれた「教師と学生」での説明をみてみよう。前者は「法文経理工農医等の区別された学問」であり、さらに「授業科目表に示されているような更に細分された諸学科」である。[34] こうした専門学科は「学生の個性を自覚せしめると共に、特殊専門の知識を与え」、「学生は自覚した個性に基づいて、社会人として職業を決定する」し、その「特殊専門の智識は職業人としての実践に役立つ」とするが、河合は、知識の内容よりも、その背後にある思想に着目した。[35] 彼によれば、専門教育もまた人格の完成につながるものであり、次のように述べた。

「…現代の専門学科は、実践に役立つ智識を供与するに遺憾はないが、すべて実践は特定の目的を持ち、その目的は更に大なる目的から派出され、かくして終局に於いて吾々の実践の最終目的に到達する、吾々は何を終局の目的として実践するのか、之が実践の根本問題であり、実践に於いて人を教える専門学科の共通の前提でなければ

ならない、ここに専門学科の教師も学生も道徳の問題に逢着して、行為の善とは何かと云う課題を扱われなくなる。[36]」

そして、また専門学科の智識自体は、学問智識に由来する真理につながるとして、美文調で次のように説明している。

「専門学科の智識は特殊専門であることの故に、智識の体系たる学問の単なる一片たるにすぎないではあろう。然し一斑を以て全豹を窺知することが出来ないではない、一部より垣間見た全智識の宝庫は遠く天涯の彼方にまで広がり、ここに汲めども尽きぬ源泉が見出される。人はかかる智識が現実の実践とは無関係に、自己の智識探求の欲望を満足せしめることを感じる。[37]」

専門教育は学問である以上、究極的には真理の価値を問うことになり、教師も学生も「専門学科を通して、学問の殿堂の前に真理の拝殿の前に立たなくなる」というのである。[38]

このようなことから専門学科を教える教師は、「智識の役立つべき実践の終局的目的を指示する」ことと、「遠く学問の体系を提示して、その中に於ける自己の専門学科の地位を明白にせねばならない」という。その点こそ、教育者が学者や研究者と異なる点である。河合は、専門教育について語りながらも、その内容は職業技術教育にとどまらず、人生観、価値観を探求するものであった。

河合にとって、大学教育で最も重要なのは「学生の人格を陶冶する」一般教育である。そこでは、陶冶の主体は学生であり、教師の役割はあくまでも補助的なものである。河合によれば、「学生をして人格性の存在を自覚せしめ、人格への陶冶が凡そ最高の価値たることを意識せしめ、動もすれば弛まんとする努力を鞭うつこと」が「教師の残された任務」であり「教師を教師たらしめる最も重要な任務である」という。これは「若き学生の燃えんとする心霊に点火して、人間最高の価値に参与する」という「最も尊まるべき任務」という。[39] この一般教育は、学生と教師との人格的交流の中でおこなわれるものであった。具体的には、オックスフォードでのテューター教育、日本では演習や面会日での人間関係を想定したと思われる。

このようなことから大学で教える者は、人格が陶冶された者でなくてはならない。河合によれば、教育者の資格として「一定の人生観を所有」し、「学生に対して愛を持」ち、「学生の個性と性格を洞察する聡明」さをもたねばならない。[40] こうした教育者を兼ねる大学の学者には独自の思想体系が求められる。このことを彼はいろいろな機会で述べているが、昭和三年に『経済往来』で述べた次の発言が最も明確である。

「今日のような時代に直面して、学徒として最も重要なことは、すべての思想を根本から築き直して彼れ自身の独自の思想体系を所有することである。単に専攻する特定の学科を整えるだけでは足りない。その科目が接近科目とどう関係するか、さらに一般科学の中に於ていかなる地位を占むるか。もう一歩進んでは、認識論から道徳哲学、社会哲学や社会思想に及ぶまで、一定の統一した体系を保持することが必要である。[41]」

彼にとって学問とは自己の思想体系の構築であり、その体系を究明しようとする者こそ学生を人格陶冶に導くのにふさわしい。

河合の学問観は、この体系志向を念頭においたものである。彼は、学問の分類をいろいろな方法でおこなっているが、『第一学生生活』では大学の科目に即して説明した。河合は、大学における学科を「思想に関する学」、「理論に関するもの」、「個々の現象に関して断片的な智識を与えるもの」に分けた。第一のものが経済学部における哲学、経済学史、社会政策、法学部における法理学、政治学史とし、第二のものが経済原論、経済政策の一部、政治学、法律学としている。自分の担当の社会政策を通常の理解とは違い、思想の学に分類しているところが特徴的である。最後の断片の学については、「景気が好いとか悪いとか、為替相場がどうとか、金利がどうとか、カルテル・トラストが幾つあるとか、船が石油が鉄がどうとか云う」ものだと評価は低い。彼にとって最重要なのは、「思想の学」であり、「現下の社会に要望せられるものは、人間および社会に対する指導原理を、明確に把握することである」と強調した[42]。

こうした学問観は、独自の大学編成案にも反映していた。昭和九年当時、経済学部評議員だった河合が『経済往来』に発表した「大学改造論」では、文系学部を社会科学部に再編することを提案していた。文学部から社会学科を、法学部から政治学科と公法、法理学などの法律学科の一部を、経済学部の商学科の経営経済学、経済学科とを合わせた学部の新設である。この学部では、哲学、倫理学、社会哲学、政治哲学、経済哲学、社会思想史など人格陶冶と思想の涵養を重視する思想的科目を充実させる。他方、実務科目は彼の大学教育構想から外れる。民法、刑法など実務的法学については、法曹養成のため法律学校（ロースクール）を学部とは別に設立し、また商学科の大半は高等商業学校

に委任すべきとする。[43] 河合にとって社会科学における大学教授の存在理由とは、何よりも哲学と理論の研究にあった。[44]

河合のこうした態度は、日本の大学、とくに帝国大学の特殊事情によるところが大きい。ヨーロッパ型の大学では、大学が教養教育をおこない、その他の高等教育機関が専門的技術教育を担うという区分があったのに対し、日本の場合、帝国大学が官僚や職業専門家養成のための専門技術教育を担い、それに対応する専門学部が設置されていた。そこでは大学と専門学校の区別が不分明であった。河合の属していた経済学部は、実務的性格が強い学部であるが、実務的専門教育においては、後の一橋大学である東京高等商業専門学校に遅れをとり、中途半端な地位にあった。

河合にとって大学とは、ヨーロッパ型の最高学府であった。彼は、T・H・グリーンの研究をつうじて、グリーンが大学社会でもたらした人格的影響とそれが同時代の社会改革につながった事実に着目していた。[45] 河合の考える教育対象は、グリーンのオックスフォードと同様に少数のエリートであった。[46] 彼は「すべての学生が大学過程を踏むことは、その資力と能力と境遇とから許されまい」とし、大学には、短期で職業専門教育をおこなう専門学校とは違い、「自己の思想を確立せんとするもの、人格の成長を希求するもの、真理を愛好するもの、知識慾の旺盛なるもの」が集まることを期待した。[47]

四　教養の実践

河合における人格陶冶の教育論は、大学教授としての彼自身の教育を踏まえたものであった。まず講義について、

彼はそれを人格の陶冶を語る場として位置づけていた。当時の帝国大学の講義のスタイルは、教授の口述筆記が通常であったが、河合は講義案を作成して配布し、授業をおこなっていた。[48] 彼の講義は、一高弁論部出身者らしくレトリックに富む雄弁なものであった。[49]

河合が最も力を入れたのは、演習であった。近代経済学者の熊谷尚夫の回想によると、河合は授業中に、大学生活では演習が決定的に重要であることをよく話していた。[50] 当時、演習は一部の教官が実施していただけで、河合の演習は競争率が高く、採用は二年次に四、五名を採用し、二年間継続するもので、参加者は十名内外に選抜された俊秀の学生であった。[51]

参加希望学生は、研究テーマを申し出、自らの読書歴を要約した志望書を提出して審査・面接を受けた。たとえば、国際政治学者の猪木正道は、最初の年に「世界とドイツ社会民主党」、翌年「マルクス主義と労働運動」というテーマを選択した。[52] 演習は、通年で毎週二時間程度おこなわれ、前半期は、認識論や道徳哲学など社会思想の根本問題を河合が提起し、討議された。これは、マルクス主義の唯物論に影響された学生の意識を討論によって論破し、新たな思想を形成させるための基礎作業として位置づけられていたと思われる。ある時間には「社会主義は資本主義よりも生産力が高いか」というテーマで、河合と当時、講師であった大河内一男が激論を交わしたこともあった。後半期は学生の研究発表とそれをめぐる討議であった。この個人発表では、学生は、河合から研究テーマに関する書物を洋書を中心に何冊か渡され、四月末から八月まで、研究発表の準備をおこなう。発表では、原稿の朗読を許されず、メモのみで演説しなければならなかった。そこでは出席者全員に発言を求め、平易な言葉で説明させた。また卒業送別会では各人にテーブルスピーチを課して批評するなど、今でいうプレゼンテーション教育への配慮も

あった。演習報告後、河合教授から非常に厳しい批評があり、荷物をまとめて故郷に帰った学生さえいたという。[53]

演習では、議論が白熱して、途中、店屋物を取り寄せ、夜まで延々とおこなったり、蕎麦屋で閉店まで議論して追い立てを受けたエピソードもあった。演習後の河合は授業と打って変わって気さくで学生と懇談したという。また、震災後、校舎が不備な時代には、教授が自腹を切って、本郷の西洋料理店「鉢の木」で開いた時代もあったようである。さらに、演習出身者と、河合行きつけの箱根の旅館「俵石閣」で合宿を開催したこともあった。当時の大学教授の立場を考えると彼の熱心な指導は異例であろう。

河合の演習で特徴的なのは、冒頭に自分が最も問題としていることについて学生に語らせて、それを討論したことである。この問題とは、研究の問題でなく、「学生の個人生活における悩み迷い、社会生活における疑惑煩悶の様な生の問題」であった。河合は、これを青年の「内的問題」と呼び、素直に語らせることに力を注いだ。この「内的問題」は理想主義の基礎となる体験であり、そこから議論に入ることによって、理想主義は単なる論理としてでなく、生きた哲学として学生の前に示された。[54] 彼は演習以外にも、週一回、面会日を設け、学生を自宅に招いて談論し、夜を徹したこともあった。[55]

昭和十年に学部長に就任すると、河合教授の教育活動の範囲は拡大した。彼は、学部長を事務的なものと考えず、学生の教育活動に尽力するものと考えて、最大限度の権限を行使した。夏前に学年別に食堂で学部長との懇談会を設け、教授と学生との「ゲマインシャフト」をつくろうと試み、学生から当局に対する希望を聴くことにも務めた。[56] また理系学部に教養科目を開設したり、留学生にテューターを配置するなどの改革をも実施した。ただし、卒業予定者対象の個別面接は、多忙に加え、健康を著しく害していた状況であえて学生と面談しようとした河合の熱意を

学生は理解せず、就職への干渉と受け取って反発したという。[57]

また河合は、学部長として「社会科学古典研究会」の設立に力を注いだ。この会は、河合門下や知己を中心に、各講師がそれぞれ社会科学の古典を取り上げ、隔週開催で二回にわたって解説する課外の授業であり、講義の後には講師との懇談会も設けられた。二円の入会金にかかわらず、二〇〇人を越える学生が参加した。研究会は河合の休職までの三年間続けられた。

河合の「学生叢書」は、以上のような学生指導の延長である。粕谷の指摘するように「自分の周囲に集まり、個人的接触のできる範囲を超えて、広く公衆に訴えようとした」のであり、[58]河合が説いていた理想的教育を学生の視点から啓蒙的に説き起こしたものと解される。彼は、学生の生活や読書に多大な関心をもち、「学生叢書」では、教養主義的な学生生活のモデルを提示した。河合は、叢書の企画と編集に熱心で、自ら編集会議を招集・司会し、主題、項目、執筆者を記した原案を出して討論した。執筆担当者は、当時における知識人の精髄を集めたといってよく、阿部次郎、安倍能成などの大正教養主義の著作家、志賀直哉、武者小路実篤、倉田百三などの作家、三木清や羽仁五郎などのマルクス主義者、高坂正顕、桑木厳翼、田中美知太郎などの哲学者、斎藤勇、高橋健二、斎藤茂吉などの文学者が集まった。担当編集者の美作は、河合の「学者・思想家としての評価とは別に、教授がエディターとしてのすぐれた力量の持ち主であることが世に知られないでいるのを残念に思った」と回想している。[59]

河合は「学生叢書」の出版経緯について最終巻の『学生と哲学』の序文において、「昭和十年頃マルキシズムの凋落に伴い、学生界は一定の目標を失い、攻学の気風の頓に衰えうるの状であった」中で「学生界に向かうべき道を示そうとした」と説明する。この叢書をつうじて「軽率なる実践を警めて深き内面的思索へと志ざし」、「それもこ

れもと漁るデカダン的な教養を排して、深き思索に源した堅実剛毅な実践」を目指したという。[60] 彼は、この「学生叢書」が「殆ど高校生活のイデオロギーを決定した」と自負していた。[61]

河合は、「学生叢書」において、自己の理想主義体系にもとづく生活スタイルを存分に提案した。『学生と読書』での読書指導においても、彼の関心が反映していた。この必読文献は、粕谷が評するように「河合榮治郎が若き日に読んだ方がよいと考えた基礎的文献を、河合流の価値観にしたがって、整然と整理展開し」たものであった。[62] 河合によれば「哲学の中の人生観の哲学が首位に立ち、その他の哲学が之に次ぎ、やがて化学、道徳、芸術、宗教の書が置かれる」とする独特の順位づけをおこなった。「何の為に読書するか、何の為に学問、道徳、芸術、宗教が存するか、凡そ一切の意義と価値とを語るものは哲学」であると彼は論じた。[63]

河合の「学生叢書」は、個人的修養だけでなく社会性を重視したことに類書との相違があった。叢書全一二巻のうち、生活、社会、学園、日本、西洋と社会を意識したテーマが目立つ。彼は学生に対して、自己を取り巻く社会、国家、世界との関係を体系的に考察することを提案していた。ただし、社会変革のための直接行動を求めたマルクス主義とは異なり、学生生活の意義が強調され、社会性の中心は学園であった。学園とは「多数の同年輩のものが集団生活を営む」場所であり、「人格的に結ばれた共同社会（ゲマインシャフト）が出来るならば、理想的であろうし」、「特殊の人と特殊の関係、即ち「友情」の関係を持ちうるならば、一層幸福であろう」と考えた。[64] 学園こそ、社会改革をおこなおうとする教養の徒にとって、基本的拠り所であるべきであった。

おわりに

河合における教育改革の諸提言の中で、「学生叢書」にみられる教養論は、学生の「習俗」に影響をもたらすという最もめざましい成果をあげた。彼の提唱した教養は、長らく学生の間で語り続けられた。それは、「学生叢書」が高等教育の中で具体的な人的関係を媒介にして受容されたことと関係があるであろう。(65)

河合の教養主義は、個人の内面的陶冶を重視したドイツ的教養やその影響の強い大正教養主義と異なった、イギリス的教養と共通点をもっていたのではなかろうか。それは、グリーンが人間の完成を社会の改革と結びつけたことに典型的なように、教養を社会改革活動と結びつける実践的視点をもつ。ラグビー校校長のトマス・アーノルドがクリスチャン・ジェントルマンを育成し、彼らがヴィクトリア期の社会改革の原動力となったように、一九世紀イギリスの教養とは、産業主義や功利主義、自由放任的個人主義という時代精神に対抗する行動倫理を含んでいた。(66) ここでの教養は、高等教育における人的関係によって実践的に培われるものであった。

河合が生きた時代の日本は、このヴィクトリア期同様、荒削りの資本主義の攻勢にさらされていた。マルクス主義や国家主義はその反動であろう。河合は、一九世紀イギリスで流行し、カーライルが多用した「社会問題」という言葉にこだわり、この問題を対象とした「社会政策」を哲学的に展開した。彼にとって、理想主義は時代に即した実践倫理としてふさわしいものであった。(67) 河合の教養主義が実践的性格をもち、社会奉仕のための公共精神に訴えかけ、教育活動を通して広められた事実を、イギリス理想主義の社会的展開とさらに照らしあわせるならば、理想主義と教養をつなぐ絆の共通性が理解できよう。

（1）　山下重一「河合榮治郎―戦闘的自由主義者」、小松茂夫・田中浩編『日本の国家思想（下）』（青木書店、一九八九年）、二三九頁。

（2）　河合は、この作業を自覚的・意図的におこなっていた。彼は「思想家は自己の思想の過程を語る義務があり、読者は之を要求する権利がある」と言っていた。『第二学生生活』、社会思想研究会編『河合榮治郎全集』第一七巻、一七一-一七二頁（以下、全集と略）。「河合事件」の法廷で河合は自己の自由主義思想を詳細に解き明かしている。法廷陳述において、当時の社会・思想状況におけるその位置づけをも河合自らが説明している。河合の政治思想を全体的に論じた文献として、前述の山下の論文のほかに、粕谷一希『河合榮治郎　闘う自由主義者とその系譜』（日本経済新聞社、一九八三年）、遠藤欣之助『評伝　河合榮治郎　不撓不屈の思想家』（毎日ワンズ、二〇〇四年）、松井慎一郎『戦闘的自由主義者・河合榮治郎』（玉川大学出版会、二〇〇五年）、土方和雄「河合榮治郎　社会民主主義の苦悩」、朝日ジャーナル編『日本の思想家（下）』（朝日新聞社、一九七五年）がある。とくに松井の研究は、豊富な一次資料をもとに河合の思想の全体像を解明し、他に追随を許さないものである。また河合の伝記については、木村健康「河合榮治郎の生涯と思想」、社会思想研究会編『河合榮治郎伝記と追想』（社会思想社、一九四八年）所収、江上照彦『河合榮治郎伝』（社会思想社、一九七一年）がある。

（3）　行安茂「河合榮治郎とT・H・グリーン解釈」、河合榮治郎研究会編『教養の思想―その再評価から新たなアプローチへ―』（社会思想社、二〇〇二年）、一九一-二〇八頁。

（4）　粕谷は「その出会いにおいて河合榮治郎の人格や思想に魅せられた者、個人的接触を重ねてその指導と感化を受けた者たちは、その人生観・世界観・価値観を変えさせてしまうような強烈な感化力をもった」と評価する。粕谷『河合榮治郎』一三一頁。

（5）　「学生叢書」は日本評論社から逐次刊行された。その内容は『学生と教養』（昭和一一年）、『学生と生活』、『学生と先哲』（昭和一二年）、『学生と社会』、『学生と読書』（昭和一三年）、『学生と学園』、『学生と科学』（昭和一四年）、『学生と歴史』、『学生と日本』『学生と芸術』（昭和一五年）、『学生と西洋』、『学生と哲学』（昭和一六年）の全一二巻であった。

（6）　政治思想史研究者の田中浩（一九二六年生）は一九四六年に河合榮治郎を「何者」なのかもわからないし、戦時中さんざん非難・中傷・攻撃された「自由主義」というタイトルにあまり好感がもてなかった」が、大枚をはたいて『自由主義の擁護』を買ったところ、ほとんど徹夜で読み、「人間にとって、「自由」や「思想」がいかに重要であるか、よくわかった」ことで思想の研究を志したという。田中浩『思想学事始め―戦後社会科学形成史の一断面―』（未来社、二〇〇六年）、一〇一頁。

しかし、昭和四〇年代以降に大学に学んだ世代では、河合の人格主義は理解しがたいものであったようである。たとえば、日本政治思想史研究者の米原謙（一九四八年生）においては「…河合は、自己の理想主義の核心であるはずの「人格主義」の中身についてはほとんど論じることはなく、内容の空虚さを補うかのように、理想主義はもっぱら唯物論批判のために援用された。理想との結合を欠いたモラリズムは「男らしさ」や「自己犠牲の精神」に帰着するのは、自明であろう」とし、「河合のモラリズムはこの時代を席巻した精神主義（「欲しがりません、勝つまでは」）と十分調和するものであった」とさえ言っている。米原謙『日本政治思想』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）、二〇七-二〇八頁。

（7）　河合が教養論を執筆した動機は、当時一世を風靡したマルクス主義に対抗するということであった。彼はマルクス主義の思想内容に対して批判的であるが、流行そのものに対しては、肯定的に見ていた。同時代においてマルクス主義が青年に歓迎されたのは、「今日まで日本には哲学らしい哲学がなかった」ゆえで「何物もなかりし所に、通俗にして分かり易き哲学が侵入した」「空家侵入に等しきもの」であるとする。しかしマルクス主義の流行によって、学生の間に「同胞への関心」と「好学の念」を強めさせ、思想体系に対する関心を喚起し、日本の水準が高まった表徴であるとさえ言った。河合はこのマルクス主義に代わるべき思想体系として、理想主義を想定し、その完成を自己の任務であると自負した。河合は、その任務を「重大なる思想史的の重要さを持つ任務」であり、「思想に志す学徒にとって、それは半生を賭するに値する任務である」と強調した。「現代学生とマルキシズム」（『経済往来』昭和六年一月号）、全集第一五巻、二一三-二三六頁。

（8）　竹内洋『教養主義の没落―変わりゆくエリート学生文化―』（中公新書、二〇〇三年）、五八-五九頁。

(9)　武田の教養主義二分論については、武田清子『戦後デモクラシーの源流』（岩波書店、一九九五年）九-一二頁、「座談会・三谷隆正先生の人と思想」、三谷隆正『幸福論』（岩波文庫、一九九二年）、二五四-二六三頁を参照。武田が河合をキリスト教的教養主義の系列に入れていることについては、「河合榮治郎の自由主義論」、『日本リベラリズムの稜線』（岩波書店、一九八七年）二七八-二七九頁、武田清子「日本リベラリズムにおける河合榮治郎」、『教養の思想』、一八-一九頁参照。

前出の松井の著作は、武田の教養主義二分論を採用しているとみられる。松井、前掲書、一二頁。そのことが満州事変、日中事変についての河合の見解を解釈する上で、やや不自然な議論展開をもたらしているのではないか。松井、一九一-二〇三頁。

(10)　武田は、新渡戸、内村起源のキリスト教人間観が、河合の人格主義的人間観にもとづく自由主義に影響を与えていたと主張するが、その具体的根拠は「二・二六事件に就て」における「神の永遠の時は真理のものである」という一文にとどまる。武田「日本リベラリズムにおける河合榮治郎」、一八-一九頁。

(11)　伊原吉之助「河合榮治郎の教養論」、『社会思想研究』、一九六四年一六巻四号。この「ヘブライイズム」と「ヘレニズム」とは、マシュー・アーノルドが『教養と無秩序』で、イギリスの知的伝統において、ピューリタン的伝統と古典古代的伝統を指した用語である。

(12)　木村健康「或る自由主義者の歩んだ道」、『学生生活』（河出書房、一九五一年）一四五-一四六頁。

(13)　武田の二分法は、唐木順三の大正教養主義批判が前提にあると推測される。唐木は「ほどよく気取り、ほどよく絶望し、しかも講壇に立ったり、花柳の巷に遊んだりするわけ知り」、「すべてのもののエピゴーネン」として、大正教養主義の「内面的生活、内生に閉じこもる」性格を批判した。唐木順三『現代史の試み』（燈影舎、二〇〇一年）、三七頁、四九頁（初版は一九四九年）。

武田は、この社会性の欠如した大正教養主義に対抗する存在として、プロテスタント的思想家を提示したのではないか。粕谷は、唐木の教養主義批判を「近代日本の思想史・文化史への展望が不十分」と批判し、唐木以降の「教養主義

批判は、唐木順三の次元以上のものは出ていない」とする。粕谷一希『反時代的思索者　唐木順三とその周辺』（藤原書店、二〇〇五年）、一一六頁。

(14) 「座談会　河合榮治郎を偲ぶ」、『社会思想研究』一九六六年、一八巻一二号、一二-一三頁。

(15) 外山茂「理想主義者としての河合榮治郎」、『社会思想研究』一九五六年、八巻一一号、三七頁。この実践的性格は河合の思想形成の事情と関連している。木村は河合の思想について「書斎の中でしずかな思索と読書によって形成された」のではなく、官界に属することで「実践のうちに内的および外的な人間的戦いを通じて体得された」と説明している。木村、前掲論文、一五四頁。

(16) 河合の場合、官僚経験もあり、社会改革に強い関心をもっていたものの、実際の政治とは距離を置き続けていた。彼は、大学教授の任務を、研究、教育、学内行政の三つが中心であるとし、学外活動については余暇があればと行うべきものと考え、文部省等の委員のほかは雑誌論文の発表などに限定していた。吉野作造や大山郁男などの活動的な政治学者と比べると、その差は顕著である。河合は社会政策という実務的な科目を担当していたのにもかかわらず、同じ科目を担当した岳父の金井延とは異なり、官庁の実際の政策形成にはほとんど携わることがなく、この科目を社会哲学的に解釈していた。河合にとって、自らの社会改革の実践とは、理想主義を教育によって広めることにあったといってよい。

(17) 大学論は全集の解説でもあまり評価されていなかったが、近年、竹内洋は、その改革の画期性について言及している。『大学という病　東大紛擾と教授群像』（中公叢書、二〇〇一年）一五八-一五九頁。

(18) 竹内『教養主義の没落』、五七頁。

(19) トクヴィルは「習俗 moeurs」を心の習慣、知性の習慣を形成する観念全体とし、次のように説明していた。「私はこの言葉［習俗］を心の習慣とも呼びことのできる、本来の意味だけでなく、人間のもつ種々の通念、人間社会に通用している多様な考え方、さらには知性の習慣を形成する観念全体に適用している。」Tocqueville, *De la Démocratie en Amérique*, vol. I (Euvres Gallimard, 1951-), p. 300.

(20) 筒井清忠『日本型「教養」の運命――歴史社会学的考察』（岩波書店、一九九五年）七三頁。
(21) 伊原「河合榮治郎の教養論」、三〇頁。
(22) 前掲論文、三〇頁
(23) 伊原は、「河合理想主義のもっていた過度の体系性と倫理性（何もかも「人格の成長」という最高価値に結びつけてやまぬお節介）こそ、衒気にみちた青年を吸引し、反発もさせた要因」であると指摘している。伊原吉之助「戦後世代と河合榮治郎」全集月報二一（一九六九年）、三-四頁。
(24) 全集第一八巻、三六七頁。
(25) 「大学改造論」全集一六巻二〇一-二〇二頁。大学のあり方が論議されるのは、世界恐慌で社会組織の根本的再建を必要とする世界文明国の一般現象であるとしている。日本では、とくに大学生の赤化が問題になっているという。
(26) 「就職難と大学教育」（『帝国大学新聞』昭和六年一月一九日）全集一五巻、七九頁。
(27) 昭和一二年の『第二学生生活』では、大学改革の遅れが「吾々の最も好ましからざる社会層」、「ファショの人達」による介入を招くことにつながったと嘆いていた。全集第一七巻、五二-五三頁。
(28) 全集第一八巻、二六〇頁。
(29) 「研究所の設立」（『帝国大学新聞』昭和五年一〇月二〇日）全集第一五巻、一七四頁。
(30) 前掲論文、一七六頁。
(31) 「大学生活の意義」（『行動』昭和一〇年六月号）全集第一六巻、三二頁。
(32) 「就職難と大学教育」全集第一五巻、一七八-一七九頁。
(33) 前掲論文。
(34) 「教師と学生」、『学生と学園』全集第一八巻、二六〇頁、二六二頁。
(35) 前掲論文、二六四頁。
(36) 前掲論文、二六四頁。

(37) 前掲論文、二六四頁。
(38) 前掲論文、二六五頁。
(39) 前掲論文、二七一頁。河合にはこういった意識が一貫して存在した。昭和四年の「大学の教育」では、「教授は教師として学生の伴侶」であり、「学生の成長は私共にとって重大な関心事である」と断言した。「大学の教育」全集第一五巻、一五三頁。
(40) 「教師と学生」、二七二-二七六頁。
(41) 「一学徒の手記」(『経済往来』昭和三年一月号)、全集第一五巻、二七七頁。
(42) 『第一学生生活』、全集第一六巻、四一-四二頁。
(43) 全集第一六巻、二二八頁。この学部編成の持論が、経済学部における実務科目担当者に対する低い評価にも現われ、学部における人事抗争にもつながったのでないかと想像できる。河合は「帝大の学問でない」と商業数学担当者の教授昇格にかたくなに反対し続け、そのことが他教授の反発を招き、河合学部長更迭に至った。竹内洋『大学という病』、一六六-一七一頁。
(44) 河合は、昭和五年に『帝国大学新聞』で、社会科学における実証部門を研究所に委ねることを提案した。実証研究には「ギルド時代の手工業」でなく「機械を使用し分業と協同とを営む工場形態に発達」することが必要であるという。ただし、それは大学とは別組織であり、学者でなく、「一定の計画を立案してそれを遂行する実際的才能」、「企業的能力」をもった人材に委ねるべきだとした。河合は実証部門を切り離した結果、「大学教授の存在の理由が社会科学の基礎たるべき哲学の方面と、社会科学の理論方面に限定されてくる」と説くのであった。「研究所の設立」全集第一五巻、一七〇-一七三頁。

当時の帝国大学では、実証研究といっても、欧米学者の学説研究か、マルクス主義の公式をあてはめた現状分析が中心であった。河合は大学での実証研究の多くを評価していなかったと思われる。たとえば、昭和一二年から一三年にかけての北支視察の新聞談話で、「支那に就て、その民族心理、その社会組織その農村生活、その同業組合等に関して、立

派な基本的研究が日本人になされていなかった」ことを「誠に遺憾」と実証研究が必要なことを力説していた。『帝国大学新聞』昭和一三年一月一七日参照。当時、同僚であった矢内原忠雄は植民政策担当として実証主義的な第一級の学者とされていた。

河合には、実証的研究のモデルとして、ダイシーの『英国に於ける法律と世論との関係』があったのではなかろうか。現在ではいささか図式的とも思われる思想史研究であるが、河合は至るところでダイシーの著作を賞賛し、「此の本を繙いたことは、私の一生に色々の旋回を与えたくらいに、大きな影響をもった」と言っていた。その研究方法について「氏が早くから心にきめたことは子供の時に聴いた選挙法改正を出立として、変わり往く英国の社会を描こうと云うことであった。それから書物と云わず雑誌と云わず、ポンチ絵双紙に至るまで、苟も世相の推移を知るに足ると思われる一切の資料を集めようとした。此の資料は六十余年積もり積もって、遂に氏の名著「英国に於ける法律と輿論との関係」になって現われた」として、「あの本をよんで自分はよく之れだけの沢山の資料を使いこなせたものと驚嘆し」、「集めた資料の何分の一しか本の中には使っていないにちがいない」、「直接本の中には現われて来ない無数の材料があるに相違ない」と評価した。

それにひきかえ現在の実証研究について、「眼で読んだものが、余りに早く手によって書かれて往く」とし、「借り入れた資本がぎりぎりに投資されている」、「余りに小額の資本が右から左へと運転されている」と批判していた。「高原より」（『経済往来』昭和二年十月号）全集第一五巻、二六一-二六二頁。

(45) 河合は、グリーンのオックスフォードにおける感化を、空前絶後であり、「人としていかに在るべきかが彼より教えられ、ヴィクトリア朝時代の道徳的空気は彼に負う所が尠くない」ものと評価し、グリーンを「類例少なき偉大な教師」だとして、何人もの同時代人の賛美を紹介した。『トーマス・ヒル・グリーンの思想体系Ⅰ』全集第一巻、一五四頁。

(46) 河合はイギリスのテューター制度に関心をもつとともに、教師と一緒に住み、学問的論争をおこなう寄宿舎を株式会社で実施する案も披露していた。「座談会　欧米の学生生活を語る」、『帝国大学新聞』昭和八年一一月六日。

(47) 『第一学生生活』全集第一六巻、一八九-一九〇頁。河合は「大学改造論」において少人数教育実現のため、帝国大

学の削減をも提案していた。全集第一六巻、二二六頁。河合はエリート教育をめざしたが、働かざるを得ない境遇にいる同年代の多くの若者への配慮をつねに学生に呼びかけていた。イギリスの大学生と同様、知的階級という恵まれた地位にともなう社会奉仕を学生に求めた。

(48) 松井、前掲書、七六頁。

(49) 山本和は河合の講義を次のように回想する。「河合教授の講義は東大名物の一つ、まことに歯切れのよい、一種独特な名調子で、引用は英独書、外国雑誌類を高くさし上げて、講義と同じスピードでその文脈内で、立板に水のような翻訳引用される。論旨は明確、透徹、一つの単純な結論へと運び、聴衆に感動と教官を巻き起こす類のものだった」。山本和「「演習」の思い出」全集、月報一五、五頁。

しかし、学生の中には、美文を並べた弁論部的な講義に反発をもつ者もいた。経済学部出身の作家である芹沢光治良は自伝的小説の中で、河合をモデルにしたK教授の講義を次のように描写した。「第一回目には、教授は参考書も両脇にかかえて、颯爽と教壇にのぼり、おもむろに参考書を机上に堆くつんで、先ず著者と書名を次々に黒板に書いては、その書物はこれだと、一冊ずつ学生に示した。それが大きな身振りのようで、好感をもてなかった。それから講義をはじめたが、テノールのような高い声で、一高の弁論部の演説のように美文を朗々と語るので、驚いた。美男子で背も高く、洋服の好みも渋くてよく、聴講していて、胸のすくほど愉しかったが、三回聴講して、僕は大学の講義でないと考えてやめた。美文にかざられて内容が空虚に感じられたからだ」。芹沢光治良『人間の運命』(新潮文庫、一九七六年)、第二巻三〇六-三〇七頁。

(50) 「座談会　河合榮治郎とその思想を語る」、『社会思想研究』一九六六年、第一八巻一〇号、一五頁。

(51) 『学生叢書』の編集に携わった美作太郎によれば、河合は、法学部の政治学科の学生まで演習に参加することを許していたという。美作太郎『戦前戦中を歩む－編集者として－』(日本評論社、一八九五年)一三二頁。

(52) 猪木正道『私の二十世紀　猪木正道回想録』(世界思想社、二〇〇〇年)、三九、四四頁。

(53) 「座談会　河合榮治郎を偲ぶ」、『社会思想研究』一九六六年、第一八巻一二号、一〇-一一頁。

(54) 外山茂「理想主義者としての河合榮治郎」、『社会思想研究』一九五六年、第八巻一一号、三五頁。

(55) 河合は非常勤であった第一高等学校でも読書会を主催したり、女子大の学生を自宅に招いたりしたことがあった。河合の演習については、美作、猪木、外山の前掲の回想のほかに、『河合榮治郎伝記と追想』における演習生の回想および山下信庸「河合先生の忘れ得ぬ思い出」、社会人大学『河合榮治郎研究　平成九年度』（一九九七年）、四三-五七頁、関嘉彦『私と民主社会主義』（日本国書刊行会、一九九八年）、三二-三七頁参照。

(56) 「一九三六年の回顧」未発表草稿、全集第二〇巻二五頁。

(57) 木村「河合榮治郎の生涯と思想」八四頁。

(58) 粕谷『河合榮治郎』一三五頁。叢書と共通する内容を全国での講演でも語っていた。多忙な上、健康も害していた河合には講演の負担は大きく、彼は出版を講演以上の伝達手段と考えていたのではなかろうか。

(59) 美作、前掲書、五〇三-五〇四頁。

(60) 全集第一八巻、三四九頁。

(61) 「一九三六年の回顧」全集第二〇巻、二七頁。

(62) 粕谷『河合榮治郎』一三五頁。

(63) 「読書の意義」全集第一八巻、五七頁。

(64) 「教師と学生」全集第一八巻、二五九頁。

(65) 竹内は、戦前の教養主義の意義として「教師や友人などの人的媒体を介しながら培われた」ことを指摘し、「教養の培われる場としての対面的人格関係は、これからの教養を考えるうえで大事にしたい視点である」という。竹内『教養主義の没落』二四五-二四六ページ。

(66) この時期のイギリスにおける教養については、レイモンド・ウィリアムズの次の文献が代表的である。Raymond Williams, *Culture and Society, 1780-1950* (New York, 1958)

唐木順三は、マシュー・アーノルドの『教養と無秩序』での教養が「ブルジョワジーの個人的自由主義、自由放任の

結果失われた権威と型のかわりに教養を以て基準にしようとする」もので、「各階級に共通する普遍的人間性を認め、その人間性全体を生かすもの」と説明した。そして、その批評的で、どこの階級にも属さない点が大正教養主義と共通していると論評した。唐木、前掲書、二九頁。マシューの教養を、社会から超越した個人的な読書三昧に過小評価した唐木の解釈は問題があるが、その教養と河合の教養に共通点があることは確かである。河合は『教養と無秩序』を読んだことがあり、その教養観に大正教養主義との共通性を感じていた。河合は、大正一五年四月二六日の日記でマシューの教養論を読んだことを記し、「丁度吾々が昔一高時代に考えていたことを云っている」と評価していた。全集第二一巻、二二〇頁。

(67) 伊原は、河合にはむしろ実践活動への要求が先にあって理想主義体系が構築されたのではないかとして次のように指摘する。「大体、河合体系の中核は、帝大学生（その卵である高校生を含む）というエリートの卵に対する呼びかけがある。「君たちはやがて社会の指導者になる。しかし世の中には恵まれぬ人たちがいっぱいる。彼らも同じ人間（人格）なのだから。彼ら（社会）のために奉仕することを忘れてはならない」という訴えである。これは真面目な青年を振い立たせる呼びかけであった。河合体系のあとの部分は、この訴えを基礎づけるための人間（人格）目的論（道徳哲学）であり、社会改革の合理化（社会哲学）であり、現状批判（社会思想）であったにすぎぬ」。伊原「戦後世代と河合榮治郎」、三頁。